

# 出雲流庭園って何？

庭園文化研究分科会 片山 直樹

## 1. はじめに

島根県東部には「出雲流庭園」と呼ばれる日本庭園がある、らしい。ここで「らしい」としたのは、出雲流庭園の定義が明らかでないからだ。出雲流庭園あるいは出雲式庭園という言葉は確かに存在し、個別の庭の紹介で引用されていることは見聞きする。しかし、出雲流庭園を題材として書かれた書物は皆無であり、昭和50年に小口・戸田らが著した『出雲流庭園—歴史と造形—』（以下、基本書とする）くらいしか私は知らない。そして、この基本書においても出雲流庭園とはどういう条件を備えた庭なのか、について明確に示されておらず分かり難いと、私は感じる（私の理解力不足によるものと思うが…）。

一方、出雲流庭園というからには、出雲地方特有の作庭様式をもつ庭園であることは間違いなく、全国的に見ても珍しい庭であろうから、実は地域観光資源となり得る可能性を秘めているのではないだろうか？ しかし、庭の所有者でそのことを意識し、地域資源としての活用や保全の必要性を考えている人は少ないと感じる。さらに、拝観者側が出雲流庭園という言葉を知っており、わざわざ出雲地方まで出向いてくるということはもっと少ないだろう。

これらのことは、出雲流庭園の知名度・認知度が低いことが一つの要因ではないかと、私は考える。

以上のことを念頭に置き、本文では出雲流庭園とはどのような庭のことを指してよいのかを検討していきたいと思う。基本的には上述の基本書を紐解き、私なりの解釈を加えるかたちで論を進めていく。出雲流庭園の認知度向上のための一助となれば幸いである。

## 2. 大分類としての出雲流庭園

一般的に日本庭園の形態は「池泉庭園」、「枯山水」、「露地（茶庭）」の3つに大別される。池泉庭園や枯山水は、池や枯池を大海と見立て、そこに浮かぶ島々をつくり、築石や石組で丘陵や山、急峻な山岳を表現した庭である。これらはいずれも、大自然の美しい景観を縮めて表わそうとしている。池泉庭園と枯山水の大きな違いは、実際に水を用い自然を表わすのか、水を用いないで象徴的に自然を表わすのかにある。これに対して露地は、樹木や、コケなどの地被類を多用して、身近にある山間の風情を表現している。同時に建物も質素な外観にすることで、山居の佇まいを表わした庭である。

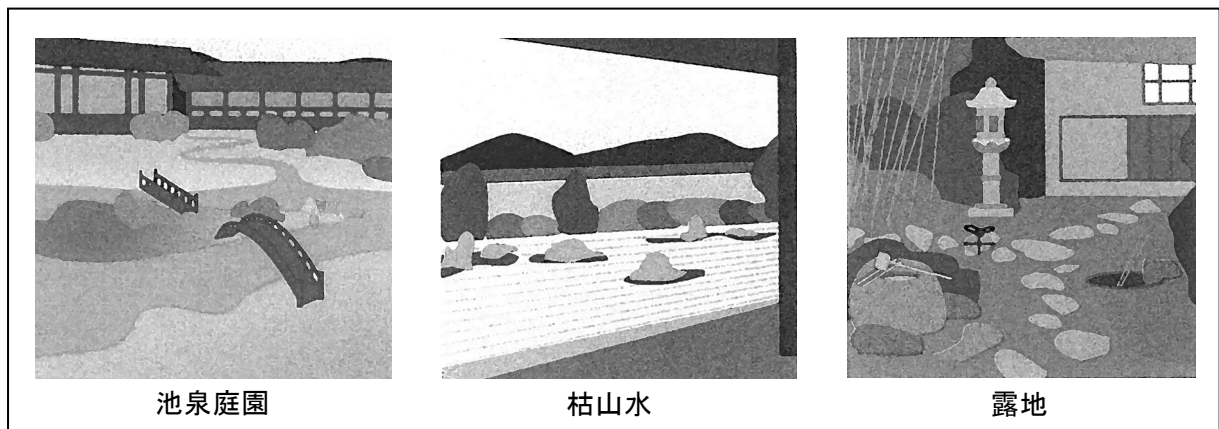


図1 日本庭園の3大分類

では、これらの大分類のうち、出雲流庭園はどれに分類されるのだろうか。基本書によると、一部で池泉部分が同居する庭もあるとされるが、大半は枯山水に属するような記述がなされている。その一方で、歴史的な背景から松平不昧公の存在を引用し「…庭の作風が茶庭的な感覚を受けるのもこの不昧からの影響である」とも記されている。したがって、露地の要素も有しているとの認識もあったようだ。



写真1 宍道町の八雲本陣庭園

ここで、枯山水とはどのような庭なのかについて掘り下げてみると、「水を用いないで山水の風景を象徴的に表現した、主として石組や敷砂によって構成された庭園」であり、「遊楽・散策などの実用的要素をもたない庭園」と定義される場合が多いと考える。つまり、枯山水は屋内から静かに庭と対峙して鑑賞するように構成されたものと認識される。

確かに、これまで拝観してきた出雲流庭園と呼ばれる庭園は、水を用いず石や敷砂で構成され、室内からの鑑賞を目的としたものが多かったが、その一方で、ほとんどの庭園には庭内に飛石が打たれ散策できるような実用的な要素を有しており、また、茶室に面して作られた庭も多く見られ、露地の要素が多く見られた（写真1）。

これらのことを考慮すると、出雲流庭園の分類としては、枯山水と露地を両極とし、その間での位置付けが個々の庭で異なってくるような曖昧なものになってしまう。このため、見立てる人によってその判断が異なる余地を与える。このような曖昧さが、出雲流庭園を捉え難くしている一因なのかもしれない。

### 3. 出雲流庭園の発生背景

では、どのような庭園であれば“出雲流”と冠してよいのかが判然としないので、出雲流庭園の発生背景を以下にまとめ、これを基に出雲流庭園が備えているべき条件を考察したい。

#### (1) 歴史的背景

出雲流庭園は江戸時代（1603～1867年）に発生したとされる。基本書によると、出雲地方に多くの庭園が造られたのは江戸末期以降から大正に至るまでであり、その要因として図2のような解釈がなされている。

つまり、豪農・豪商の出現による富と権力の集中が生じ、それらが藩と交流を持つ過程で始まったのが出雲地方における庭園文化であり、それに松平不昧公の影響により茶道のエッセンスが組み込まれ、独自の庭園文化が醸成されていったのである。

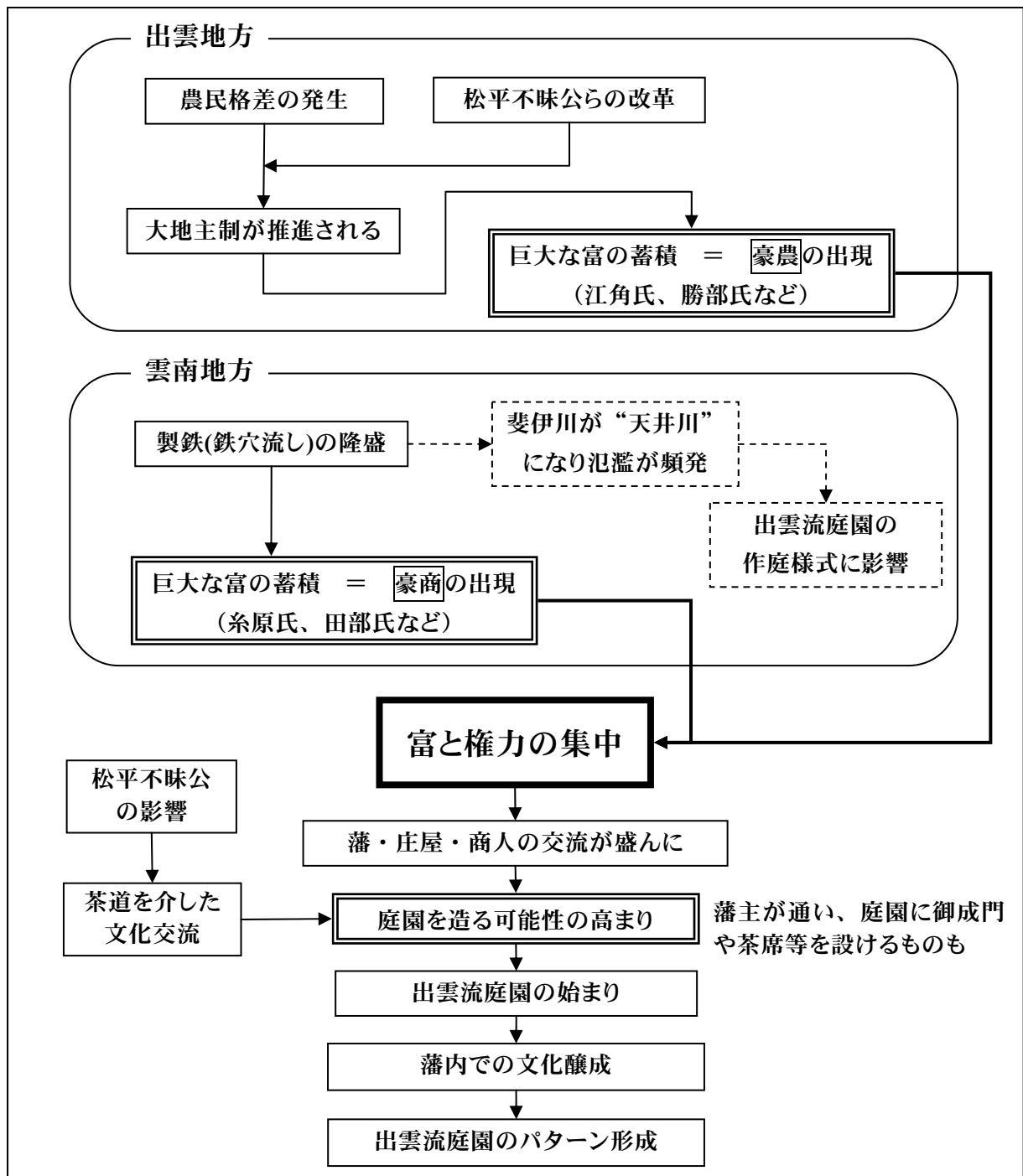


図2 出雲流庭園が成立した歴史的背景

(2) 人間的背景

面白いことに、基本書では出雲地方に住む人間の性格、いわゆる“県民性”にも言及し、出雲流庭園が成立した背景を述べている。

基本書によると、「一般的な心理学者の述べていることは、出雲は全国的に分裂質で、内向型であり神経質なタイプが多い。臆病で繊細であるため、じきに不安にとらわれて、自分のカラに閉じこもろうとする。また、傷つきやすいので、周囲との接触を極度に避けるから積極性が無く、人間関係では弱気を示す、と言われている」とある。

そして、このような性格は、権威、秩序を重んじ、革新的な物事には戸惑いを見せるがゆえ

に、出雲流庭園の文化を成熟させ、作庭様式のパターン化に至らしめた大きな要因であるとしている。

上記の“一般的な心理学者”の説は、昭和当時の出雲地方における性格分析結果に基づくものであるから、そのまま江戸時代あたりの出雲人にあてはめるのも無理はあろうとを感じるが、しかし、性格が形作られる大きな要因として、地域の気候・風土があることを考慮すると、それらの変化が比較的小さいと思われる出雲地方については、気質の変化も小さく、かなりの部分であてはまるのかもしれない。

### (3) 風土的背景

上述した人間的背景にも示したように、出雲人の気質、そして文化が出雲の風土により形作られた部分は小さくないと思われる。出雲を含む山陰地方の天候は、その名が連想させるように曇や雨が多い。表1に2008年における都道府県別の年間降水量の上位10県を示すが、冬の季節風の影響のため、日本海側の各県での年間降水量が総じて多い傾向にある。

表1 年間降水量都道府県ランキング(2008年)

順位	都道府県	年間降水日数(日)
1	石川県	165
2	鳥取県	164
3	富山県	163
4	福井県	158
5	新潟県	157
6	島根県	151
7	秋田県	148
8	青森県	146
9	山形県	135
10	滋賀県	133
⋮		
47	広島県	91
全国平均		117

※引用：気象庁観測部「気象庁年報」2011公表

そして、この冬季の気候の特徴は、この地方の庭の形態にも大きく影響している。出雲平野に見られる築地松は、冬季に強く吹く北西からの季節風の風除けとして、主に建物の西と北を囲うように植えられたものである。そして、この築地松と建物の位置関係から、自ずと庭が置かれる位置も決まってくるのである。

基本書で調査された出雲流庭園の9割、平野部だけに限定すればその全てが、建物の西南部に造られている。これは、日照条件を良くするために建物を敷地北側に寄せて南側に大きなスペースを作るといふ、現代でも行われている工夫に加え、西側の築地松を背景として庭を造ることが実に合理的かつ好条件であったことが大きい(写真2)。

また、出雲地方の風土を形成しているものとして、出雲平野を蛇行し宍道湖へ流下する斐伊川の存在も、出雲流庭園の作庭様式に大きく影響している。斐伊川は、古代より上流域で行われてきた「たたら製鉄」の影響もあり天井川となり、川は度々氾濫し、その度に出雲平野に造られた庭園が埋没してしまったことであろう。このことも、池泉を伴わない庭が多い理由と、基本書の著者は考えている。



写真2 斐川町の原鹿江角邸庭園（右手が築地松）

これに加え、平野部では高低差が得難く池泉に水を導き、排水することが困難であったことも一因と考えられる。つまり、池泉庭園を造りたくても造れなかったのである。

このように、出雲平野で発達した庭園であったが故に、その作庭様式が画一化し、出雲流庭園という文化を練り上げていったものと推察される。

#### 4. 出雲流庭園の必要条件

以上に示した出雲流庭園の発生背景から一定のパターンをもった作庭様式が形成され、出雲流庭園は成立したのだと考えられる。したがって、出雲流庭園にはこれらの背景に伴った“痕跡”がなければならないと考える。以下に、私が考える出雲流庭園が備えているべき2つの必要条件を示す。

##### (1) 露地の要素を含む枯山水であること

出雲流庭園の様式としては、露地の要素を多く含む枯山水であるといえよう。これは、出雲平野においては池泉庭園よりも水を用いない枯山水庭園を選ばざるを得なかったことと、松平不昧公の影響による茶道の文化が組み込まれたことが背景として挙げられることによる。露地の要素とは、すなわち、飛石や石灯笼、蹲、沓脱石、そして茶室などである。

しかし、このような要素が組み込まれた完全な露地となってしまうのは、出雲流庭園たりえないと、私は考える。これは、出雲流庭園にとってもう一つの重要な要素となる敷砂があるべきと考えるためである。

一般に、露地には敷砂が用いられない。これは、露地は市中の山居、すなわち町中に居ながらにして山中の風情を楽しむことを目的としていることから、庭内には樹木や下草、コケ類が綿密に配置される場合が多いためである。

出雲平野で成立した出雲流庭園は、庭内に水を引き込み池泉を造ることができず、そのため枯山水の様式に倣い、敷砂により大海を表現したのだと思われる。そして、このような観念的な部分のほかに、実用面での利もあり、庭内に敷砂が用いられていると考えられる。

表1にも示したように曇や雨が多く日照時間の少ない山陰地方であったため、建物南側の庭に白い敷砂を敷き詰めることで建物内に反射光を取り入れる作庭法となった可能性がある。し

たがって、出雲地方特有の出雲流庭園であるためには、庭内に敷き詰められた敷砂は必要な要素となろう。

## (2) 平面的な庭園であること

出雲平野でみられる、現在出雲流庭園と呼ばれる庭のほとんどが平面的で立体的ではない平庭である。つまり、枯池などの凹地や、枯滝、築山などの小丘が無く、平べったい構成の庭であるということである。これは、平野部ではこのような地形変化を与えることに労力が必要であり



写真3 京都竜安寺石庭

敬遠されたということもあろうが、基本書によると、これも出雲地方の風土が大きく影響しているとする。

出雲地方は、夏は湿度が高く冬は積雪があり、加えて斐伊川氾濫による洪水が多いこともあり、昔の建物の床面はかなり高かった。基本書によると、当時の建物の床面の高さは、地面から70～120cm程度の高さであったようだ。このように高い建物から庭を鑑賞すると、自ずとアイポイントが高くなり、庭を見下ろす形となる。

ここで、庭を鑑賞する場合には一般的に3つの視点があり、それは庭園を「見上げる」「平行に見る」「見下ろす」である。「見上げる」あるいは「平行に見る」ことを考慮した庭園は、立体的な構成とすることで、観るものにより一層の迫力や神秘性を与える効果がある。

一方「見下ろす」庭の場合、たとえ立体的な構成としたところで、その効果は薄らいでしまう。このような庭の多くは、例えば京都竜安寺石庭などのように、砂紋（敷砂の模様）の美しさや、低めに設えられた庭石の配置などを楽しむ造りとなっている場合が多い（写真3）。

出雲流庭園は、建物の床面を高くせざるを得ない風土的な背景があったことから、「見下ろす」ことを意識した庭園となり、そのため平面的な構成の庭が基本となっていったものと思われる。

## 5. おわりに

出雲流庭園が成立した背景を考えていくと、オリジナルの出雲流庭園は以上の2つの要素を有するものである必要があるかと、私は考える。

しかし庭の様式は、お互いに混じり合い、画然と分類しかねる折衷的なものもあるため、上記した2つの大局的な条件のみから出雲流庭園であることの判断を行うことは実際的ではないのかもしれない。

したがって、より細部な点、すなわち作庭技法に着目し、出雲流庭園であるか否か、または、出雲流庭園の技法がどの程度取り入れられた庭であるかを判断する必要もあろうかと考える。

出雲流庭園として特有の作庭技法とは、例えば飛石の高さが比較的高いことや、踏み分け石の大きさ、短冊石の使い方などが基本書には示されている。今後はこれらの技法について、どの部分に独自性があるのかを検証しつつ、出雲流庭園を判断する指標として利用しやすいよう情報発信していく必要があると考える。